

# 日本語プロミネンスの知覚能力が 口頭産出課題に及ぼす影響

— 中国語を母語とする日本語学習者を対象として —

郭 昱 昕

(2011年10月6日受理)

Influence of Perception Ability for Japanese Prominence on Performances of Oral Production Tasks: For Chinese Students Learning Japanese as a Second Language

Guo Yuxin

**Abstract:** Since the prominence showing the mind of emphasis expresses the element of contrast, and the focus of utterance, if it is used unsuitably, it may become how to appeal against the mistaken opinion, or feeling which is not meant to a hearer may be transmitted. Moreover, when perceiving the utterance intention which cannot perceive correctly the rhythm which the speaker emitted but is expressed by prominence goes wrong, a possibility that a hearer will do the dialog and utterance contrary to a speaker's real intention is high. For the Chinese students learning Japanese as a second language, this research examined whether the consciousness capability in Japanese prominence was a factor which influences the word-of-mouth production capability. As a result, the results higher rank group of the consciousness to an utterance intention turned into a word-of-mouth production results higher rank group irrespective of the existence of the context. That is, in the Chinese learner, it was admitted that the consciousness capability over an utterance intention had influenced the word-of-mouth production capability of Japanese prominence. It is thought by raising from this the consciousness capability over the utterance intention that prominence was therefore expressed that word-of-mouth production capability may improve.

Key words: Japanese prominence, perception ability, oral production, Chinese learner

キーワード：日本語プロミネンス、知覚、口頭産出、中国人学習者

## 1. はじめに

対話に用いられる音声は、文字通りの意味だけでなく、韻律の変化を媒介に話し手の発話意図や心的態度に関する情報も伝達している（前川，2000）。日本語母語話者は、普段これらの韻律特徴によって、自分の発話意図の伝達と、相手の発話意図の判断を行っている。

日本語を学習している外国人日本語学習者にとつて、日本人と円滑にコミュニケーションを行えるよう

になることが大きな目標であるため（岡田，2006）、正しい日本語をより日本語らしく自然な発音で話すと同時に、日本語母語話者同様に話し手が発した韻律特徴を正確に知覚することが必要である。しかし、発音においても知覚においても、習熟度の高い学習者でもなかなか直らない点が多く、誤解を招く発音で、発話意図がわからないような対話をしている場面によく遭遇する。

強調の意を表すプロミネンスについて、土岐（1993）

は、「その現れ方などがわかりやすく、学習するのはさほど難しいことではない」と述べている一方、このプロミネンスは、対比の要素や発話の焦点を表しているため、不適切に使われると、間違った主張の訴えかけ方になったり、聞き手に意図しない感情が伝わってしまったりする場合がある。その場合は、聞き手の誤解を招き、聞き手の感情面に害を及ぼし、話し手が不利な立場になる。話し手と聞き手のコミュニケーションが円滑に出来なくなる可能性が高いと考えられる。また、話し手が発した韻律を正確に知覚することができず、プロミネンスによって表現された発話意図を理解することに失敗した場合は、話し手の真意に反する対話や発話になる可能性が高い。その場合も、聞き手と話し手の対話における意図の食い違いが生じ、コミュニケーションが円滑に出来なくなる。したがって、日本語のプロミネンスにおいて、その知覚も口頭産出における実現も、早い段階から正しく習得することが望ましい。

## 2. 先行研究

日本語母語話者のプロミネンスに対する知覚の研究として、谷口・丸山(2006)や長尾・天野(2000)がある。谷口・丸山(2006)は、(a)話者の意図通りにフォーカス位置を判断することができるか、(b)句末の音調変化が聞き手のフォーカス知覚にどのような影響を与えるのかの2点を明らかにすることを目的に、20~30歳代の東京語話者6名の音声データを用いて、20~30歳代の言語学・音声学を専門としない日本語母語話者50名を対象とした知覚実験を行った。その結果、句末音調の位置によって多少は正解率に差があるものの、日本語母語話者は、聞き手として、話者の意図通りにフォーカス位置を判断でき、その判断は句末音調に大きく影響されないことがわかった。

長尾・天野(2000)は、(a)F0(基本周波数)の変化によって、聞き手が正確に話し手の強調した単語を認識できるのか、(b)強調部分と非強調部分のF0の対立が話し手の意図を正確に伝えるために機能しているのか、(c)強調部分の知覚におけるF0の最小値の役割は何かの3点について検討を行った。実験では、「そこには、W1のW2があります。」を材料に、4種類の東京語話者の原音声进行操作し、19~30歳の東京地方出身者16名を対象に知覚実験が行われた。その結果、日本語母語話者において、F0が強調部分の知覚に貢献していることが確認された。また、より強調されていると判断された単語が逆転する知覚境界は、各単語のF0ピーク値の差によって推定できることが分かつ

た。ただし、F0最小値も強調部分の知覚に影響がある可能性が示唆された。

以上のことから、日本語母語話者はF0の変化などを利用し、話し手の発話にあるプロミネンスを正確に知覚し、その発話意図まで聞き取っているといえる。

他方、韻律の口頭産出に影響する要因について、以下のような研究があげられる。

郡(2006)は、「発話の音調(音の高低の動き)」の規定要因を大きく次の5つに分けて考察している。その規定要因は、以下の5つである。1)発話の構造・意味と談話内での役割、2)話し手の心理的状态、身体的状態、社会的属性、3)話し手と聞き手の社会的・心理的關係、4)発話環境、5)特定場面に定まった話し方の型、個人性、時代性。以上の要因について、特に、「発話の構造・意味と談話内での役割」は、すでに多くの研究が行われている。林・西沼・谷部(2007)は、話し手の心理的状态、社会的属性や、話し手と聞き手の社会的・心理的關係に関係している社会言語学的な観点からは、話し手が音声情報に託して何を伝えようとしているか、聞き手がそこからどのような情的信息を受け止めているのかを明らかにした。

また、別の観点から音声の口頭産出に影響する要因を検討した研究もある。田嶋(2004, 2005, 2006)は、言語音声の音節リズムの知覚と口頭産出における実現を左右するさまざまな音声学・心理学的要因を検討し、音声の知覚と音声の口頭産出における実現の共通点や相違点を探った。具体的に、1)語彙的要因、2)音韻構造に関わる要因、3)音響的要因の3つの要因に大別し、それらの要因と人間による韻律情報処理過程との関係を明らかにした。田嶋(2006)は、語彙的要因の効果に注目し、英単語やそれに対応するカタカナ語に対する主観的親密度が音節リズムの知覚と口頭産出における実現にどのような影響を及ぼすかについて検討した。親密度が異なる単語を刺激語とし、日本語話者を対象に音節数同定課題および音声産出課題を行い、音節の聞き取りと発話に対する親密度の影響は等しいことが明らかとなった。この結果は、外国語音声の認知過程においては母語の語彙知識からの干渉をほとんど受けないことを示唆した。さらに、田嶋(2006)は、外国語音声リズムの知覚と口頭産出における実現との関係をより詳しく探るため、日本語話者が発話した日本語に存在しない英語子音連鎖の時間的特徴を音響分析により調査した。その結果、子音連鎖における相対的時間長は、日本語話者と英語母語話者とで一貫して異なることがわかった。この結果は、日本語母語話者による英語子音連鎖の発話は英語母語話者とは異なることを示唆しており、知覚することが困



群と知覚課題の成績下位群の2水準を用いた。

- 3) 文脈あり条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現に影響する1要因として、プロミネンスの位置に対する知覚能力を想定し、これを実験参加者間要因とする1要因配置し、知覚課題の成績上位群と知覚課題の成績下位群の2水準を用いた。
- 4) 文脈なし条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現に影響する1要因として、発話意図に対する知覚能力を想定し、これを実験参加者間要因とする1要因配置し、知覚課題の成績上位群と知覚課題の成績下位群の2水準を用いた。
- 5) 文脈なし条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現に影響する1要因として、韻律の異同に対する知覚能力を想定し、これを実験参加者間要因とする1要因配置し、知覚課題の成績上位群と知覚課題の成績下位群の2水準を用いた。
- 6) 文脈なし条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現に影響する1要因として、プロミネンスの位置に対する知覚能力を想定し、これを実験参加者間要因とする1要因配置し、知覚課題の成績上位群と知覚課題の成績下位群の2水準を用いた。

### (3) 材料

1) 日本語文の口頭産出・プロミネンスの筆記産出課題用材料文は、『日本語能力試験出題基準 改訂版』(国際交流基金, 2002)の3, 4級語彙リストから「時間」, 「人物」, 「場所」を表す名詞, 各24単語を選定した。各24単語の中, 平板型アクセント単語12語と起伏型アクセント単語12語であった。選定された「時間」, 「人物」, 「場所」を表す名詞, 各24単語をそれぞれランダムに「○○(時間)××(人物)と△△(場所)に行きます/行きました。」という文面上感情が含まれない中立陳述文を24文作った。

2) 知覚課題用材料文は、日本語文の口頭産出・プロミネンスの産出課題用材料文の類似文であった。材料文の音声は日本語母語話者東京話者1名(女性)と日本語母語話者(東京話者による方言チェック済み)1名(男性)によってそれぞれ12文が録音された。

### (4) 装置

文脈あり条件日本語文の口頭産出課題(日本語文の口頭産出課題①)と文脈なし条件日本語文の口頭産出課題(日本語文の口頭産出課題②)の2つの実験にはパーソナルコンピュータ(SOTEC PC-R502A5)とその周辺機器, 集音マイク(SONY ECM-719)が用いられた。また, 実験プログラムはSuper Lab Pro 4.0(Cedrus社製)を用いて作成された。

発話意図に対する知覚(知覚実験①), 韻律の異同

に対する知覚(知覚実験②), プロミネンスの位置に対する知覚(知覚実験③)の3つの実験にはパーソナルコンピュータ(SOTEC PC-R502A5)とその周辺機器, ヘッドホン(SONY MDR-AV305)が用いられた。また, 実験プログラムはSuper Lab Pro 4.0(Cedrus社製)を用いて作成された。

### (5) 手続き

実験は日本語文の口頭産出実験と知覚実験の2つの部分に分けて, 1回目は口頭産出課題①, ②, プロミネンスの筆記産出課題を行い, 2回目に知覚課題①, ②, ③を行った。産出実験に影響されないように, 知覚実験は産出実験が終わった1~2週間後に行った。

#### 1) 口頭産出課題①

<文脈あり条件日本語文の口頭産出課題>

実験は雑音のない教室で個別に行われた。本試行は1ブロック24文からなり, 文の呈示順序はブロック内でランダムであった。実験参加者はコンピュータの画面に視覚呈示される日本語の質問文を手掛かりに, ターゲット文のプロミネンスを考えた上で, 日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現が求められた。

コンピュータ画面の中央に注視点が1000ms呈示され, その後文脈として呈示される質問文が4000ms, ターゲット文が4000ms呈示され, 再度質問文が4000ms, ターゲット文が4000msという順番で呈示された。質問文の2回目の呈示が消えると同時にターゲット文の口頭産出が求められた。画面にある文をそのまま音読することを避け, 文脈を有効にし, 参加者自分自身の考えたプロミネンスを実現させるため, 1回目に視覚呈示された質問文とターゲット文を黙読し理解することと記憶することが求められた。実験過程は参加者の許可を得て録音された。なお, 本試行の前に練習試行を6試行を行い, 実験手続きについて十分理解させた上で本試行に移った。

#### 2) 口頭産出課題②

<文脈なし条件日本語文の口頭産出課題>

実験は雑音のない教室での個別に行われた。本試行は1ブロック24文からなり, 文の呈示順序はブロック内でランダムであった。実験参加者はコンピュータの画面に視覚呈示される日本語のターゲット文を「【 】」を用いて表示される指定された箇所プロミネンスを置いて, 日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現が求められた。

コンピュータ画面の中央に注視点が1000ms呈示された後, ターゲット文(指定されたプロミネンスの箇所表示なし)が4000ms, 次にターゲット文(指定されたプロミネンスの箇所表示あり)が4000ms視覚呈示された。2回目の指定されたプロミネンスの箇所の

表示されたターゲット文が呈示されると同時にターゲット文の口頭産出が求められた。画面にある文をそのまま音読することを避け、プロミネンスを実現させるために、1回目視覚呈示されたターゲット文を黙読し理解することと記憶することが求められた。実験過程は参加者の許可を得て録音された。なお、本試行の前に練習試行を6試行行い、実験手続きについて十分理解させた上で本試行に移った。

### 3) プロミネンスの筆記産出課題

＜プロミネンスに対する知識の有無確認＞

実験は雑音のない教室で個別に行われた。本試行は1ブロック24文からなり、文の呈示順序はブロック内でランダムであった。実験参加者は紙に呈示される日本語の質問文を手掛かりに、ターゲット文のプロミネンスを筆記産出することが求められた。なお、本試行の前に練習試行を6試行行い、実験手続きについて十分理解させた上で本試行に移った。

実験終了後、未知単語についての確認を行った。

### 4) 知覚課題①

＜発話意図に対する知覚＞

実験は雑音のない教室で個別に行われた。本試行は1ブロック24文からなり、音声の呈示順序はブロック内でランダムであった。実験参加者はヘッドホンから聴覚呈示されるターゲット文を聞き、ターゲット文の音声のみを手掛かりに、発話の中で最も強調したい内容を理解するように求められた。

コンピュータ画面の中央に注視点が1000ms呈示された後、ヘッドホンからターゲット文が2000ms～3000ms聴覚呈示され、回答時間が4000ms与えられた。実験参加者は回答時間内に回答用紙にあるターゲット文を表す数字から話し手の発話意図を最も反映する語を選択するように求められた。なお、本試行の前に練習試行を6試行行い、実験手続きについて十分理解させた上で本試行に移った。

### 5) 知覚課題②

＜韻律の異同に対する知覚＞

実験は雑音のない教室で個別に行われた。本試行は1ブロック24ペアの文(48文)からなり、音声の呈示順序はブロック内でランダムであった。実験参加者はヘッドホンから聴覚呈示される2文のターゲット文を聞き、韻律が異なるか否かを知覚するように求められた。

コンピュータ画面の中央に注視点が1000ms呈示された後、ヘッドホンからターゲット文ペアが4000ms～6000ms聴覚呈示され、回答時間には4000ms与えられた。実験参加者は回答時間内に回答用紙にあるYES/NOの選択肢から両音声に含まれるプロミネンスの韻律が同じ場合はYESを、違う場合はNOを

選択するように求められた。なお、本試行の前に練習試行を6試行行い、実験手続きについて十分理解させた上で本試行に移った。

### 6) 知覚課題③

＜プロミネンスの位置に対する知覚＞

実験は雑音のない教室で個別に行われた。本試行は1ブロック24ペアの文(48文)からなり、音声の呈示順序はブロック内でランダムであった。実験参加者はヘッドホンから聴覚呈示される中立発話文とターゲット文を聞き、中立発話文の音声を基準に、ターゲット文のプロミネンスの位置を知覚するように求められた。

コンピュータ画面の中央に注視点が1000ms呈示された後、ヘッドホンから中立発話文が2000ms～3000ms、ターゲット文が2000ms～3000ms聴覚呈示され、回答時間に4000ms与えられた。実験参加者は回答時間内に回答用紙にあるターゲット文を表す数字からプロミネンスの箇所を選択するように求められた。なお、本試行の前に練習試行を6試行行い、実験手続きについて十分理解させた上で本試行に移った。

実験終了後、日本語学習歴などに関するフェースシートの記入と未知単語についての確認を行った。

## 5. 結果と考察

分析対象は口頭産出課題の得点と知覚課題の得点であった。実験終了後の未知単語確認テストと、プロミネンスの筆記産出課題のプロミネンスに対する知識の確認により、未知単語であると判断された項目、プロミネンスに関する知識がないと判断された参加者は分析対象から除外された。また、参加者の都合により、知覚実験に参加できなかった者も除いた。その結果、分析可能なデータは54名分であった。

採点方法は次の通りである。6つの課題、すなわち、知覚課題①、②、③、口頭産出課題①、②、プロミネンスの筆記産出課題のすべてにおいて、正解は1点、不正解は0点とし、24点満点で採点を行った。

Figure 1, Figure 2, Figure 3, Figure 4, Figure 5, Figure 6に各条件における平均得点及び標準偏差を示す。文脈あり条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現と文脈なし条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現において、発話意図に対する知覚能力、韻律の異同に対する知覚能力、プロミネンスの位置に対する知覚能力のそれぞれは要因であるか否かについて、*t*検定を行った。

*t*検定を行った結果、文脈あり条件日本語文の口頭産出課題では、発話意図の知覚課題の成績上位群の

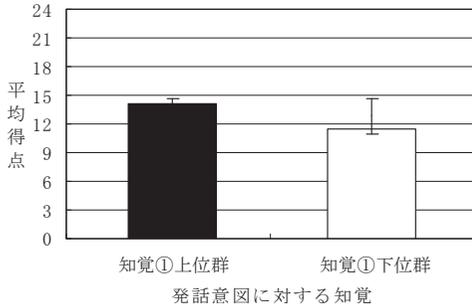


Figure 1. 文脈あり条件日本語文の口頭産出における発話意図の知覚の上位群・下位群の平均得点及び標準偏差

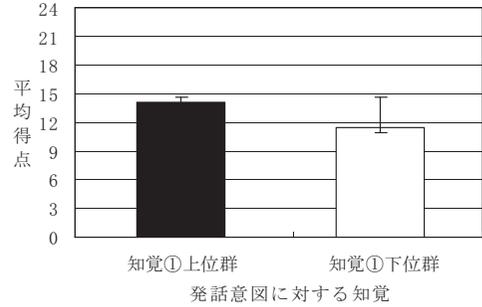


Figure 4. 文脈なし条件日本語文の口頭産出における発話意図の知覚の上位群・下位群の平均得点及び標準偏差

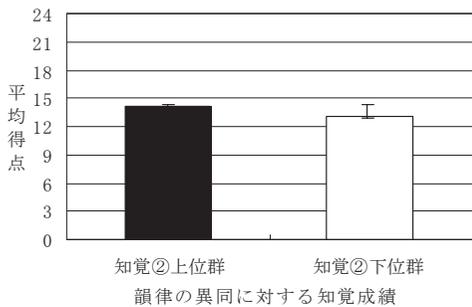


Figure 2. 文脈あり条件日本語文の口頭産出における韻律の異同の知覚の上位群・下位群の平均得点及び標準偏差

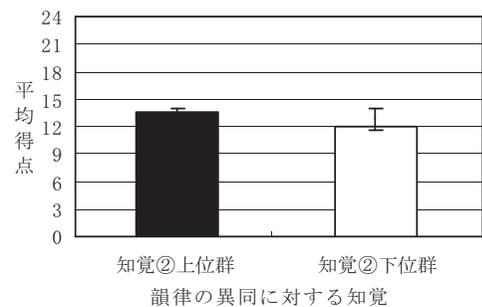


Figure 5. 文脈なし条件日本語文の口頭産出における韻律の異同の知覚の上位群・下位群の平均得点及び標準偏差

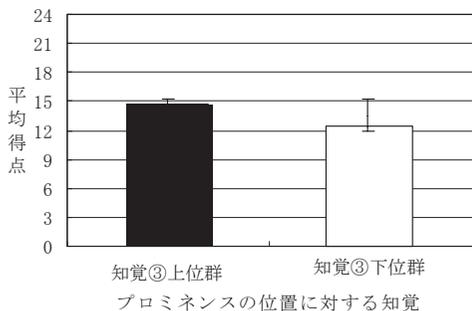


Figure 3. 文脈あり条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの位置の知覚の上位群・下位群の平均得点及び標準偏差

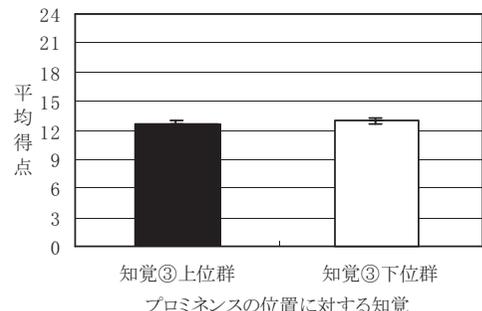


Figure 6. 文脈なし条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの位置の知覚の上位群・下位群の平均得点及び標準偏差

口頭産出課題の成績が、発話意図の知覚課題の成績上位群・下位群の口頭産出課題の成績より有意に高かったが ( $t(52) = 2.07, p < .05$ )、韻律の異同の知覚課題の成績の上位群と下位群の間では、口頭産出課題の成績における有意差が見られず ( $t(52) = 0.74, n.s.$ )、プロミネンスの位置の知覚課題の成績の上位群と下位群の間でも、口頭産出課題の成績における有意差が見られなかった ( $t(52) = 1.68, n.s.$ )。文脈なし条件日本語文の

口頭産出課題では、発話意図の知覚課題の成績上位群の口頭産出課題の成績が、発話意図の知覚課題の成績下位群の口頭産出課題の成績より有意に高かったが ( $t(52) = 2.41, p < .05$ )、韻律の異同の知覚課題の成績の上位群と下位群の間では、口頭産出課題の成績における有意差が見られず ( $t(52) = 1.49, n.s.$ )、プロミネンスの位置の知覚課題の成績の上位群と下位群の間でも、口頭産出課題の成績における有意差が見られな

かった ( $t(52)=0.21, n.s.$ )。

また、被験者内では発話意図に対する知覚課題の成績、韻律の異同に対する知覚課題の成績、プロミネンスの位置に対する知覚課題の成績が、文脈あり条件日本語文の口頭産出課題の成績と、文脈なし条件日本語文の口頭産出課題の成績のそれぞれよりも高いか否かについて、プロミネンスの知覚課題の成績と日本語文の口頭産出課題の成績（平均得点と標準偏差）で検討した。知覚課題と口頭産出課題の成績を Table 1 に示す。

**Table 1 知覚課題と口頭産出課題の成績**  
(平均得点と標準偏差)

知覚課題①	知覚課題②	知覚課題③
18.5 (3.68)	22.0 (2.35)	23.0 (2.28)
口頭産出課題①	口頭産出課題②	
13.0 (5.09)	12.5 (4.18)	

注：括弧内は標準偏差である。

本研究では、中国人学習者における日本語のプロミネンスの知覚能力は、日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現能力に影響する要因であるか否かについて検討した。その結果、中国人学習者の発話意図の知覚課題における成績上位群が、文脈の有無にかかわらず、日本語文の口頭産出課題の成績も高かった。つまり、中国人学習者において、発話意図に対する知覚能力は日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現能力に影響する要因であることが認められた。仮説1「発話意図に対する知覚、韻律の異同に対する知覚、プロミネンスの位置に対する知覚の3つの知覚課題におけるそれぞれの知覚成績の上位群は、文脈あり条件日本語文の口頭産出課題と文脈なし条件日本語文の口頭産出課題それぞれにおいて、口頭産出課題の成績も高いであろう。」の一部が支持された。

また、実験参加者内の知覚課題の成績と口頭産出課題の成績を比べたところ、54名中4名は、口頭産出課題の成績とプロミネンスの知覚課題の成績がほぼ同じで、54名中2名は、口頭産出課題の成績がプロミネンスの知覚課題の成績より少し高かったが、それ以外では、つまり88.9%の参加者では3つの知覚課題の成績が、2つの日本語文の口頭産出課題の成績より、高いことがわかった。つまり、仮説2「被験者内では発話意図に対する知覚、韻律の異同に対する知覚、プロミネンスの位置に対する知覚の3つの知覚課題における知覚成績は、文脈あり条件日本語文の口頭産出課題と、文脈なし条件日本語文の口頭産出課題における口頭産出課題の成績のそれぞれよりも高いであろう。」が、

一部の学習者を除いて、支持されたと考えられる。

プロミネンスの知覚能力に関する研究として、谷口・丸山(2006)がある。谷口・丸山(2006)は、話者の意図通りにフォーカスの位置(本稿では、プロミネンスで)を判断することができるか否かを明らかにするため、日本語母語話者50名に知覚実験を行った。その結果、多少正解率に差があるものの、日本語母語話者は聞き手として話し手の意図通りにフォーカスの位置を正確に判断できることがわかった。谷口・丸山(2006)の結果と比べて、本実験で見られた中国人学習者の知覚成績は、8点(正答率33.33%)から24点(正答率100%)まで広がっており、日本語のプロミネンスが知覚できない中国人中・上級学習者が少ないことがわかった。この結果は、河野(1993)の「上級学習者でも日本語母語話者の知覚に近づいていない」という指摘を支持するものである。

本実験では、中国人学習者における日本語のプロミネンスに対する知覚能力は、文脈あり条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現においても、文脈なし条件日本語文の口頭産出におけるプロミネンスの実現においても、影響する要因と認められた。よって、不正確な知覚がターゲットとなる韻律を正確に実現することを阻害している可能性が高く、その知覚能力を向上させることによって、口頭産出におけるプロミネンスの実現能力も向上する可能性があると考えられる。

これまでは、学習者が日本語文を口頭産出する際に、正確に韻律を実現することができない場合は、教師が、あるいは、学習者自身が、モデル音声を繰り返して呈示し、その音声情報で韻律を学習する活動がよく行われてきた。しかし、何度聞いても口頭産出における韻律の実現の失敗が目立つ学習者は少なくない。前述のように、この場合は、学習者がモデル音声そのものを正確に知覚することができない可能性もあるため、ひたすらモデル音声を繰り返して聞く方法は効果がない場合がある。つまり、知覚が先行しているため、音声指導を行う際、学習者の韻律に対する知覚能力を高める必要があると考えられる。

## 6. 今後の課題

知覚能力を高めるためには、まず知覚能力がどのような要因で構成されるのかを解明する必要がある。日本語の韻律に対する知覚能力を構成する要因として、前述した「母語の知覚転移」「日本語文に対する意味理解能力」「音韻短期記憶容量」のようなものがあると、これまでの研究から明らかとなった。では、中国人学

習者の日本語のプロミネンスに対する知覚は、どのような要因に影響されているのであろうか。本実験の結果をふまえ、今後検討する。

## 【引用文献】

- Flege, J. E., & Port, R. (1981). Cross-language phonetic interference: Arabic to English. *Language and Speech*, 24, 125-146.
- 福田倫子 (2005). 第二言語としての日本語の聴解とワーキングメモリ容量—中国語母語話者を対象とした習熟度別の検討— 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部 (文化教育開発関連領域), 53, 294-304.
- 河野俊之 (1993). プロソディーと感情的表現—無意味語および一語文を用いて— 外国人を対象とする日本語教育における音声教育の方策に関する研究 重点領域研究日本語音声研究報告書, 217-235.
- 郡 史郎 (1989). 強調とイントネーション 講座日本語と日本語教育2 日本語の音声と音韻 (上) 316-342.
- 郡 史郎 (2006). 日本語の『口調』にはどんな種類があるか 音声研究, 10, 52-68.
- 国際交流基金 (2002). 日本語能力試験出題基準 改訂版 凡人社
- 前川喜久雄 (2000). パラ言語的情報 別冊国文学現代日本語必携, 53, 172-175.
- 松見法男 (2006). 言語学習と記憶 縫部義憲 (監修) 迫田久美子 (編集) 講座・日本語教育学 第3巻 言語学習の心理 (pp.161-183). スリーエーネットワーク
- 松見法男 (2007). 記憶—聴解の「今」を支える心的機能— 2007年度日本語教育学会春季大会予稿集, 39-44.
- 長尾恭子・天野成昭 (2000). 発話における強調表現の知覚: 基本周波数による発話意図の識別 電子情報通信学会技術研究 EA 応用音響, 100, 47-54.
- 小河原義朗 (1997). 発音矯正場面における学習者の発音と聞き取りの関係について 日本語教育, 92, 83-95.
- 岡田亜矢子 (2006). コミュニケーションのための発音指導実践 早稲田大学日本語教育実践研究, 4, 117-126.
- 田嶋圭一 (2004). 外国語音声における音節の知覚: 音響的要因と音韻的要因の比較 法政大学文学部紀要50, 145-159.
- 田嶋圭一・加藤宏明・山田玲子・アマンダ・ロスウェル (2005). 母語話者と非母語話者による日本語特殊拍の知覚: 発話速度の効果 日本認知心理学会第3回大会発表論文集, 69.
- 田嶋圭一 (2006). カタカナ外来語が外国語音声の知覚に与える影響 日本認知心理学会第4回大会発表路文集, 186.
- 谷口未希・丸山岳彦 (2001). 焦点構造と助詞の卓立 KLS 21 関西言語学会, 56-66.
- 谷口未希・丸山岳彦 (2006). 句末音調とダウンステップ 電子情報通信学会技術研究報告 SP 音声, 106, 19-24.
- 土岐 哲 (1990). 中国人・韓国人・アメリカ人による日本語のイントネーションとプロミネンス 講座日本語と日本語教育3 日本語の音声と音韻 (下) (pp.258-287). スリーエーネットワーク
- 土岐 哲 (1993). 音声上の虫食い文補填の手掛かりとなる韻律的要素 外国人を対象とする日本語教育における音声教育の方策に関する研究 重点領域研究日本語音声研究報告書, 29-35.
- 宇都木昭 (2004). 韓国人日本語学習者の日本語におけるフォーカス発話と中立発話の音声的・音韻的特徴 音声研究, 8, 96-108.

(主任指導教員 松見法男)